

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：35309

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K11063

研究課題名（和文）ケアサイクルにおける高齢者のストレンクスに関する研究

研究課題名（英文）Research on Strengths of the Elderly in the Care Cycle

研究代表者

小薮 智子（Koyabu, Tomoko）

川崎医療福祉大学・保健看護学部・講師

研究者番号：70435345

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ケアサイクルにおける高齢者のストレンクスを明らかにしその測定尺度を開発することと、高齢者のストレンクスがQOLに直接およびストレンクス活用感を介して関連すると仮定した因果関係モデルを実証的に検証することであった。Rappのストレンクスモデルに基づき18の質問項目を準備した。ケアサイクルにある高齢者に自記式質問紙調査を実施し、確認的因子分析を行い、高次因子モデルの尺度を完成した。高齢者のストレンクスからQOLのパス係数は、直接よりもストレンクス活用感を介した方が高く、活用感の重要性が示された。援助者の不適切なかかわりが高齢者のストレンクス活用感を下げることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回開発した尺度によって、ケアサイクルにある高齢者のストレンクスを客観的に評価でき、高齢者の持つストレンクスを活かした支援が可能になると期待する。また仮説モデルの検証で、ソーシャルワークで用いられるストレンクスモデルに、ポジティブ心理学の知見であるストレンクス活用感を組み込み、その関連を明らかにしたことは、本研究の新規性であると考えられる。高齢者が今持っているストレンクスを増やす介入は難しいが、活用感を高める介入、不適切なかかわりを減じる介入、という支援の方向性が明らかになったことは本研究の成果であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop a scale to measure the strength of elderly people to analyze the relationship between other factors.

We prepared 18 questions and administered questionnaire survey to elderly people. A confirmatory factor analysis yielded an optimal higher-order factor model with internal and external resources as secondary factors.

And, structural equation modeling was used to determine the goodness of fit of a model that assumes that the strength of elderly people affects QOL both directly and through the sense of strength utilization, and that the inappropriate involvement of caregivers affects the sense of strength utilization. The goodness of fit of the hypothetical model to the data satisfied the statistical criteria. Our findings revealed that it is not only important for the elderly to have strength, but also have a sense of utilizing the same to experience improved QOL, and that the inappropriate involvement of caregivers reduced the sense of utilization of strength.

研究分野：老年看護

キーワード：高齢者 ストレンクス ケアサイクル

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国の2021年の高齢化率は28.9%となり世界に類を見ない高さである。2065年には38.4%に達すると推計されており、医療費をはじめとする社会保障の急増が見込まれる中で、保健医療制度の持続可能性が懸念されている。限られた医療・介護資源を有効に活用し、必要なサービスを確保していくことは、我が国において喫緊の課題である。厚生労働省は2015年に保健医療2035提言書をまとめ、我が国の課題として、単なる負担増と給付削減による現行制度の維持を目的とするのではなく、新たな価値やビジョンを共有し、イノベーションとして取り込み、システムとしての保健医療の在り方を転換しなければならない時期を迎えている、と指摘している。加齢に伴い身体機能、認知機能が低下し、社会的にも弱い立場にあると考えられている高齢者のケアにおいても、高齢者自身がもつ強み、ストレングスを見過ごすことなく、焦点を当て、資源として活用する、新たな価値への転換が求められる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ケアサイクルにおける高齢者のストレングスを明らかにし、その測定尺度を開発することと、高齢者のストレングスが、QOLに直接およびストレングス活用感を介して関連すると仮定した因果関係モデルを実証的に検証することである。介入が可能な統制変数を投入し検証することで、高齢者のストレングスが発揮される支援の示唆を得る。

3. 研究の方法

(1) ケアサイクルにある高齢者のストレングス尺度の開発

調査対象

研究への参加を自己決定でき、質問紙調査への回答が可能な要支援・介護認定を受けた高齢者、あるいは介護サービス・介護予防サービスを利用する高齢者

調査方法

自記式質問紙調査を実施した。全国の相談施設や生活施設、介護サービスを提供する事業所、計1400か所に質問紙3部を送付した。

調査内容

前年度に実施した「退院支援看護師が認識する高齢者のストレングス」の質的研究の結果から、尺度はRappのモデルに基づき、個人のストレングスである「熱望」「自信」「能力」と、環境のストレングスである「社会関係」「資源」「機会」の6因子を下位概念としてアイテムプールを作成した。ケアサイクルにある高齢者の特徴が質問項目に反映されるよう、前述した質的研究の結果を参考にし、研究者間で議論を繰り返し、内容的妥当性の確保に努めた。また、外的基準からみた妥当性を確認するため、包括的環境要因調査票(CEQ)と自尊感情尺度を尋ねた。

分析方法

ストレングスの測定尺度の構成概念の側面からみた妥当性を検討するために確認的因子分析を行った。演繹的解釈による次元性を検討するため、3つのモデルを仮定した。モデルは複数の因子を仮定しない一次因子モデル、モデルは「熱望」「自信」「能力」「社会関係」「資源」「機会」の6因子からなる二次因子モデル、モデルは二次因子に「個人のストレングス」と「環境のストレングス」を配置した高次因子モデルであり、これらのモデルのデータへの適合性を確認した。確認的因子分析ではロバスト重み付き最小二乗法(Weighted Least Square with Mean and Variance adjusted estimation; 以下、WLSMV)による推定法を用いた。適合性は適合度指標Comparative Fit Index(以下CFI)、とRoot Mean Square Error of Approximation(以下RMSEA)を用いた。さらに外的側面からみた妥当性を検討するためにCEQと自尊感情尺度とのSpearman's ρ 相関係数を求めた。なお内的整合性からみた信頼性は、信頼関係を算出した。上記分析には統計ソフトMplus7.4、SPSS27.0を用いた。

調査時期

2021年3月~7月

倫理的配慮

川崎医療福祉大学の倫理委員会の承認を得て実施した。(承認番号20-095)

(2) 因果関係モデルの実証的検証

調査対象

研究への参加を自己決定でき、質問紙調査への回答が可能な要支援・介護認定を受けた高齢者、あるいは介護サービス・介護予防サービスを利用する高齢者

調査方法

自記式質問紙調査を実施した。全国の相談施設や生活施設、介護サービスを提供する事業所を改めて無作為抽出し、計3000か所に質問紙3部を送付した。

調査内容

前年度に作成したケアサイクルにある高齢者のストレンクス尺度、ストレンクス活用感(0~10のNumerical Rating Scale)、石原らの高齢者のQOL評価票、援助者のエイジズムに基づく不適切な関わり(著者らが作成した5項目)

分析方法

ストレンクスがQOLに直接およびストレンクス活用感を介して影響し、さらにストレンクス活用感に援助者のかかわりが影響すると仮定したモデルのデータへの適合度を構造方程式モデリングにより検討した。まず各尺度の確認的因子分析を行い一次元性の確認後、仮説の因果関係モデルへのデータの適合度を確認した。

調査時期

2022年6月~9月

倫理的配慮

川崎医療福祉大学の倫理委員会の承認を得て実施した。(承認番号22-013)

4. 研究成果

(1) ケアサイクルにある高齢者のストレンクス尺度の開発

調査協力へ同意のあった施設は59箇所であり、それらの施設に配布を依頼した質問紙は540部であった。250部の返送があり、同意欄にチェックのない回答、欠損値の多い回答を除いた212名が分析の対象となった。

一次因子モデルであるモデルは、項目の誤差間に複数相関を認めることで適合度指標はRMSEA=0.099, CFI=0.928と統計学許容水準を満たした。Rappの6因子を仮定した二次因子モデルであるモデルの適合度指標はRMSEA=0.085, CFI=0.947であり、統計学的許容水準を満たしていた。さらに、高次因子モデルであるモデルの適合度指標はRMSEA=0.073, CFI=0.961であり、モデルよりも適合度指標は良好であった。モデルの結果を図1に示す。

ケアサイクルにある高齢者のストレンクス尺度と、CEQとは0.633(p<0.01)、自尊心とは0.548(p<0.01)の有意な中程度の相関がみられた。

信頼性係数は、「ストレンクス」0.944、「個人」0.931、「環境」0.920であった。位因子の信頼性係数は、「熱望」0.860、「自信」0.814、「能力」0.803、「社会関係」0.857、「資源」0.778、「機会」0.810であった。

以上から、18項目からなるケアサイクルにある高齢者のストレンクス尺度の妥当性と信頼性が確認でき、高次因子モデルであることが明らかであった。

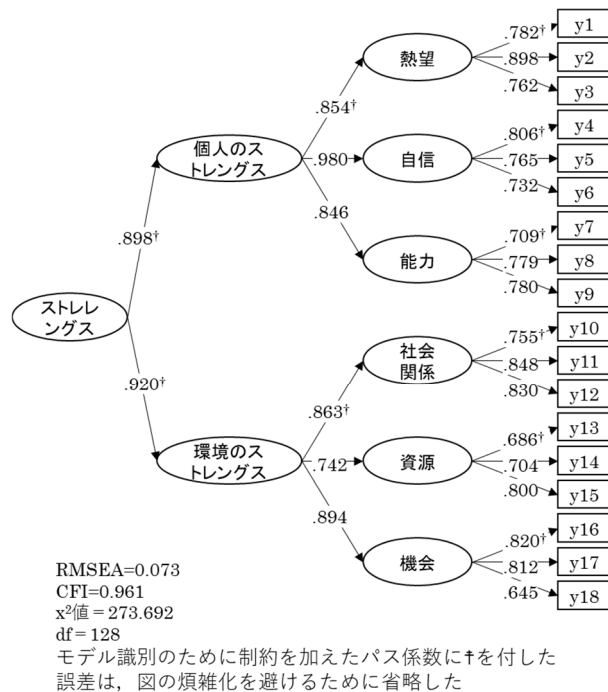


図1 モデルⅢ

(2) 因果関係モデルの実証的検証

調査協力へ同意のあった施設は95箇所であり、それらの施設に配布を依頼した質問紙は415部であった。303部の返送があり、同意欄にチェックのない回答、欠損値の多い回答を除いた230名が分析の対象となった。

仮説モデルの検証にあたり、まず既存の尺度の確認的因子分析を行った。ケアサイクルにある高齢者のストレンクス尺度は、RMSEA 0.096, CFI 0.912で、許容水準を満たし、「熱望」、「自信」、「能力」、「社会関係」、「資源」、「機会」を一次因子、「個人のストレンクス」と「環境のストレンクス」を二次因子とする高次因子モデルであることを確認した。援助者のエイジズムに基づく不適切な関わりは、RMSEA 0.065, CFI 0.995で許容水準を満たし、一次因子モデルであることを確認した。高齢者のQOL評価表では、パス係数が1を超える不適解が認められたため、尺度開発の手順に沿って探索的因子分析で2因子に負荷量の高い項目を1つ削除した。再度探索的因子分析をした結果、2因子に負荷量の高い項目はなく、想定していた3因子が抽出された。確認的因子分析においても、不適解はなくRMSEA 0.046, CFI 0.985と許容水準を満たし、11項目で「現在の満足感」、「心理的安定感」、「生活のハリ」を一次因子とする、二次因子モデルであることを確認した。

これらの尺度を用いた、仮説の因果関係モデルへのデータの適合度は、CFI 0.902, RMSEA 0.062であった。ストレンクスは活用感に0.662, QOLに0.456の関連があり、活用感もQOLに0.599の関連があった。さらに援助者の不適切な関わりは活用感に-0.394の関連がみられた。結果を図2に示す。

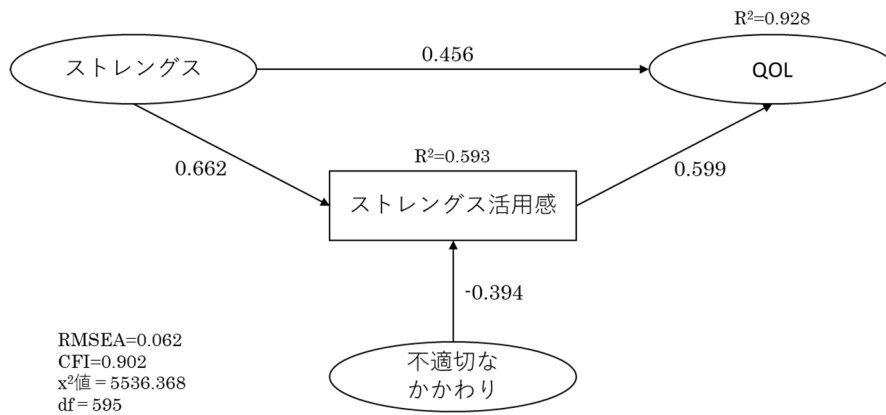


図2 高齢者のストレスとQOLの関係モデル

高齢者のQOLを高めるためには、ストレスを持っているだけでなく、活用している感覚が重要であり、この活用感は、援助者のエイジズムに基づく不適切な関わりにより低下することが明らかになった。

今回、ソーシャルワークで用いられるストレスモデルに、ポジティブ心理学の知見であるストレス活用感を組み込み、その関連を明らかにしたことは、本研究の新規性であると考えられる。また、高齢者が今持っているストレスを増やす介入は難しいが、活用感を高める介入、不適切なかかわりを減じる介入、という支援の方向性が明らかになったことは本研究の成果であると考えられる。援助者は、高齢者が自身のストレスを活用する機会を奪うことがないように、留意する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小藪智子, 松田美鈴, 上野瑞子, 井上かおり, 竹田恵子, 名越恵美, 實金栄	4. 巻 25(3)
2. 論文標題 ケアサイクルにある高齢者のストレングス尺度の妥当性と信頼性の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本保健科学学会誌	6. 最初と最後の頁 127-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小藪智子, 原瀬愛理, 井上かおり, 上野瑞子, 松田美鈴, 竹田恵子, 名越恵美, 實金栄	4. 巻 27
2. 論文標題 退院支援看護師が認識する自宅へ退院した高齢者のストレングス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 退院支援看護師が認識する自宅へ退院した高齢者のストレングス	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小藪智子, 上野瑞子, 松田美鈴, 井上かおり, 竹田恵子, 實金栄
2. 発表標題 ケアサイクルにある高齢者のストレングス尺度簡易版の妥当性と信頼性の検討
3. 学会等名 日本看護研究学会中国・四国地方会第35回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小藪智子, 上野瑞子, 松田美鈴, 井上かおり, 竹田恵子, 名越恵美, 實金栄
2. 発表標題 ケアサイクルにある高齢者のストレングスとその活用感, 援助者の関わりのQOLへの関連
3. 学会等名 日本老年看護学会第28回学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小藪智子, 上野瑞子, 松田美鈴, 井上かおり, 竹田恵子, 名越恵美, 實金栄
2. 発表標題 ケアサイクルにある高齢者のストレスとその活用感, 援助者の関わりのQOLへの関連
3. 学会等名 第33回日本老年学会総会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	上野 瑞子 (Ueno Mizuko) (00808230)	川崎医療福祉大学・保健看護学部・准教授 (35309)	
研究分担者	竹田 恵子 (Takeda Keiko) (40265096)	川崎医療福祉大学・保健看護学部・教授 (35309)	
研究分担者	井上 かおり (Inoue Kaori) (70771070)	岡山県立大学・保健福祉学部・助教 (25301)	
研究分担者	實金 栄 (Mikane Sakae) (50468295)	岡山県立大学・保健福祉学部・教授 (25301)	
研究分担者	松田 美鈴 (Matsuda Misuzu) (40794996)	川崎医療福祉大学・保健看護学部・講師 (35309)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------